

いのちの海と空と大地



原発のない世界を求めて ニュースレター

発行： 日本聖公会「正義と平和委員会」原発問題プロジェクト

1. 核兵器と脱原発

1945年8月 6日広島、9日長崎に人類史上初めて原子爆弾が投下されました。想像もつかなかったすさまじい原子爆弾の威力は、たった2発で二つの都市を、一瞬のうちに破壊しました。人類の歴史上、かつて経験しなかった、すさまじい破壊力による死者と放射能による被曝という未曾有の災害がもたらされました。この恐ろしい原爆の開発は各国が戦時中から競争して進められました。日本は失敗しました。米国は1歩先んじて成功し、日本に投下されたのです。戦後も原爆の開発競争は続き、世界各地で、大規模な核実験が行われました。核技術は米国の独占的なものではなくなり、際限のない核兵器開発競争の様相を呈していました。米国がビキニ環礁で行った水爆実験は、広島原爆の1,000倍の威力があるものでした。付近の海域で操業していた日本の漁船、第五福竜丸はじめ多くの漁船が被曝し、久保山愛吉さんが亡くなった事は大きく報道されました。

このような状況の中で、米国のアイゼンハワー大統領は、**1953年12月**、国連総会にて「**核の平和利用 (Atoms for Peace)**」という演説をしました。それまで、原子炉は、原爆の原料となるプルトニウムを造り出すために用いられていましたが、以降、原子炉は、核分裂の際に発生する膨大な熱エネルギーを、発電のための蒸気を製造するために用いるのが主流となったのです。

戦後の日本には、**非核三原則**というものがあります。それは、核兵器を①持たず、②作らず、③持ち込ませず（持ち込まさず）というものです。①と②は一見、確かに守られているかに見えますが、実は、原爆の原料となるプルトニウムは既に約48トン（うち約37トンは英・仏で保管）もの量が再処理工場に保管されています。これだけのプルトニウムがあれば、6,000発を超える

原爆の製造が可能だと言われています。そして③に関しては常に米軍基地に飛来する地域の不安の種となっています。横須賀港を母港とする原子力空母は、発電所ならば 600Mw 級という原子炉を有する軍艦ですが、東京湾の真ん中に停泊するのです（原子力空母自体が核兵器です）。非核三原則はこの様にしてなし崩しにされているのです。

原発のウラン燃料は、ウラン鉱山で採掘され、濃縮や加工が行われ製造されます。その過程で生じるウラン残土の処理、発電所での使用済み核燃料の再処理、そして最終処分される高レベル使用済み核燃料の安全管理（放射能レベルが下がるまでの 10 万年間）など、すべてのプロセスで被曝の危険を伴います。

イラン戦争の中で使われたと言われている**劣化ウラン弾**は核燃料の精製過程で得られる残渣を原料として製造されますが、その威力は、戦車の鋼板を貫徹するといわれます。そして使用された地域を放射能で汚染し、地域の人々を内部被曝させることになるのです。

原発の運転によって蓄積されてゆくプルトニウムを減らすために MOX 燃料として消費しようというのがプルサーマル計画であり、政府が再稼働にこだわる理由です。しかし、廃炉が決まった「もんじゅ」や完成しない「六ヶ所再処理工場」など、基本となる**核燃料サイクル計画は全て破綻**しているのです。

北朝鮮は米国に対する交渉カードとしての核・ミサイル開発に力を入れてきました。今、その対立の構図が大きく変化しつつあります。**朝鮮半島の非核化**という大きな目標の実現に向かうよう期待しています。

中米の**コスタリカは軍隊を放棄**した国として有名ですが、「軍隊を廃止したことにより、コスタリカには敵がいなくなった。敵ではない国を攻める国はない」と当時の大統領は言いました。軍備に必要だった予算は教育や福祉に向けられ、コスタリカは国民にとって豊かな国となりました。

武力に武力で対抗する政策の先に平和はありません。紛争当事国や弱い立場の人々が同時に滅びる道があるだけです。

原発のない国を実現するというのは、**武力を放棄する事**でもあります。

そのためのプロセスは多くの困難を伴うものと予想されますが、この困難に向き合う事はそれ自体に大きな価値があるのです。